Beyond A and Z*

21 世紀は経験したこともないような暴力で幕を開けた。9・11 は、20 世紀後半に世界に君臨した米国の威信と、西側諸国の覇権をぐらつかせることになった。一方我が国でも 3・11 とそれに続く止むことのない地震や災害が次々と国土を荒らし、人々の心に不安をもたらしている。そして今世紀の新たな社会的インフラとなったインターネットや SNS が、これらの事態をスペクタクル化しつつ増幅する。そしてこの未曾有のインフラは、圧倒的な速度と量で世界に情報を散乱させつつ、これまで隠れていた負のものをも浮上させ、民主主義とはなんであったか、20 世紀の世界秩序とはなんであったのかなどの疑問を次々と我々に突きつけている。

既存のシステムや価値観は揺らぎ、新たな分断と対立が世界を覆い、私たちの立っている地面は大きく揺さぶられている。個人と社会、自然と人間、IT と人間、倫理と資本主義、善と悪、等々を安定させていた既存のシステムが流動化する今、わたしたちは既知の価値観に安住することはできない。

アートの歩みもこれと共振するかのように激しく揺らいでおり、マルチカルチャリズムやポスト植民地主義のもと、ソーシャリー・エンゲイジド・アートなど、これまでの価値観とはまるで異なるように見えるアートが新しい時代を席巻している。わたしたちは、近代主義者のようにはもはや「純粋な」絵画を信じることはできないし、またかつての「美」なるものをそのまま受け入れることもできない。実際のところ、何を信じて作品をつくったらよいのか、誰もが一度は途方に暮れるしかない。アーティストはこれまでの場所に留まることはできない。そこではもはや自由にアートと戯れることはできないからだ。アーティストはこの分断と対立、価値の不確実化と流動化に向き合わねばならない。そしてその向こうに自由なアートの再生の刹那を見出すことが必要だ。

本展では、こうした大小様々の問題意識をそれぞれの形で宿し、制作に結びつけているアーティストたちを選んだ。「Beyond A and Z」とは、A から Z という既成の価値観、既定の表現を超えて、そこからはみ出す表現を行うアーティストたちを集め、その向こうに新たな表現の可能性を見出そう、という意味を込めたものである。そこでは、個々の作品の中で、アーティストたちは葛藤し、各々の闘争線を引いているのである。以下、本展出品者の作品を会場順に紹介しよう。

*

東本伊代のインスタレーション作品は、レースのカーテンの小綺麗な部屋に靴を脱いで上がる。すると壁には、本来水平に固定されるべきモニター、安定しているべき世界の基準＝水平線が回り出し密漁の話を語りだす。それは絶対と思われていた基準が、気付いてしまった罪悪感によって、善悪の基準が揺らぎ出す様を詩的に表している。夜の海の黒い映像としらじらとしたリビング、柔らかなレースのカーテンが対比され、よく見れば床に落ちている砂粒や石ころによって 2 つの世界は融合し始めるのである。

村瀬ひよりの絵画は、「他者」を画面の中に取り入れる。つまり彼女の絵画の内容は最初から構造的に分断されており、相反する価値観を同一の画面に埋め込んでいるのだ。そして両者は互いに別世界に住まっているかのようだ。場合によってはそれはメディアから供給される他者であり、例えば《さかいめ②》において、左手前には寄り添う二人がいて、右側の窓の向こうでは、赤ん坊を連れた母親が首を絞められようとしている。村瀬はこれらの作品をイスラエル・パレスチナ紛争や能登半島地震から触発されて感じた「自分と他者の距離」を描いたものだと述べている。

横山奈美は、近年ネオン管のシリーズで発表を続けている。彼女の一貫した制作姿勢は、透徹した自己省察に基づいており、自分の置かれた世界と憧れの世界の関係、ネガティヴなものも含めそこに生まれる様々な感情を作品化してきた。ある時類似の構造を日本の近代の画家の中に見出し、そこからそうした感情を肯定し、受け入れることによって、日本の近代美術を再発見し、現代に接続することに成功した。今回出品される「history」は、彼女の近しい人物による筆跡をもとにした、さらなる展開を示すものである。

川西りなの「絵画」《a lot of》は、絵画という構造物の中でももっとも狭い縁の面を画面とし、衝立か仕切り壁のように壁から垂直に突き出して展示される。ただし浮いているために緊張感が強く漂っている。その奥行きが途方もないものになって、もはや絵画というより倒錯した絵画、一見最も絵画的に見えないフォーマリスティックな絵画を生み出したと言えようか。こうしてやっと確保された細長い画面にはかつてのパターン・ペインティングのようにクローバーが描かれ、各画面に 1 つずつ 4 つ葉のクローバーが潜んだ絵画となり、我々に迫ってくるのである。

林可奈葉のキャンヴァスにかかるカットされた綿布は、外界との一種のバリケードのようなものだという。表現者に対して起こりうる他者からの攻撃という不安から「意識を守るように用途のない装飾で武装」するというのだ。これは彼女が「他者との関わり」から「自分の存在を確認」するための方途の一つだ。他者の視線が組み込まれ、幾層にも重なりつつ懸垂線状に垂れるカットされた綿布がその光の形をキラキラと反射させるこの作品は、装飾被膜と表現主体と他者の関係性によって成立しているのである。

林玲翔の《untitled》は、３つの薬玉の入れ子構造になっている。薬玉は開いた時に中から何が出てくるかがミソだが、出てきたのがまた薬玉だったという事態が、2 度繰り返されている。これによって、薬玉は、祝いの冷ややかなパロディとなり、その下の円形ステージ演台も空疎なものとなる。祝いの内容が全く明かされずに、空虚なお祝いが 2 度起こったのだが、あと一回チャンスが残されてはいる。もうひとつの《untitled》では碁盤が、なんらかの理由で立ち上がってしまい、囲碁の試合ができなくなった状況を示しており、あらゆる秩序は、別の秩序に依存していることを暗示している。

安田夭は、他の作家同様絵画科出身であるが、自らラップを作詞・作曲し、演じるようになった。彼は自身の個人的な境遇や、社会に蔓延る様々な理不尽な状況をいささか暴力的に歌詞に表す。社会から排除され、置き去りにされる様々な問題に対する怒りが彼の表現の根源にある。今回の展示《Constellations》は彼のラップに映像をつけた映像作品と、彼の部屋でのそのメーキングの鬱屈した日常の記録が流れ、部屋は彼の実際の部屋と生活が感じられるような空間としてつくられている。

＊

以上の 7 名のアーティストはそれぞれの立ち位置から、この分断と対立、価値の不確実化と流動化の時代にそれぞれの問題に向き合い、彼女・彼らなりの自由なアートの再生の刹那を見出そうと各々の闘争の線を引いている。それらの線分が本展で交差し、互いを照らし出し、鑑賞者に届くことを期待したい。

（2024 年 7 月 12 日、横山奈美・小西信之）

*本展は国際芸術祭「あいち」の「芸術大学連携プロジェクト」として国際芸術祭「あいち」組織委員会と愛知県立芸術大学の主催で開催される展覧会である。県内４つの芸術大学が毎年一度企画展を行うシリーズで、ここアートラボで行われている。
本展は現在愛知芸大の油画専攻の学部・大学院に在籍している、または卒業・修了したアーティスト６名（全員 20 代）に加え、修了生でかつ現在教員である１名、合計７名のアーティストたちの展覧会である。この７名は本展を企画をした本学芸術学と油画の教員がセレクトした。